Topics: 中国古代四大美人

“西施”，“王昭君”，“貂蝉”そして“杨贵妃”の4人が「中国古代四大美人」と称される。4人の美しさを形容する言葉は有名で，その成り立ちが逸話として知られている。

西施	Xī Shī:	沉鱼	chényú	（魚が沈む）
王昭君	Wáng Zhāojūn:	落雁	luòyàn	（雁が落ちる）
貂蝉	Diāo Chán:	闭月	bìyuè	（月が隠れる）
杨贵妃	Yáng Guìfēi:	羞花	xiūhuā	（花が羞じらう）

【西施】（せいし）春秋時代末期の人。美の化身であり，美人の代名詞。“情人眼里出西施。”Qíngrén yǎn li chū Xī Shī.（恋人の目には相手が西施に見える，あばたもえくぼ）という諺があり，今でもよく使われる。また“东施效颦”Dōng Xī xiào pín（西施には胸の病があり，ときどき胸元を押さえ，眉間にしわを寄せて歩いた。その姿がなまめかしくも美しく，里の人たちの注目を集めた。それを見た一人の醜い女が西施のまねをして同じように眉間に皺を寄せて歩いたところ，人々の顰蹙をかった。身の程をわきまえず人まねをするのは愚かなことという喩え。『荘子』による）という成語も有名だ。また杭州の西湖は，西施の一字を充てたといわれる。松尾芭蕉は「奥の細道」で「象潟や雨に西施がねぶの花」の句を詠んでいる。

西施がある日川辺で洗濯をしていたら，そのあまりの美しさに魚が引き寄せられ，泳ぐことすら忘れ，魚が川底へ沈んでしまったと伝えられる。

【王昭君】（おうしょうくん）漢の元帝の時，匈奴を懐柔せんと皇帝は後宮の女官を匈奴の王に妻として差し出すことにした。元帝は醜い女性を選ぶため，宮女の似顔絵帳の中で最も醜く描かれていた王昭君を選び出す。別れに臨み王昭君と面会すると，皇帝はそのあまりの美しさに彼女を選んだことを大いに悔やむが時既に遅し。実は画家が賄賂を贈らなかった王昭君をわざと醜く描いたのだった。この画工は間もなく激怒した元帝により処罰された。

秋の良く晴れた日，王昭君は祖国に別れを告げ，匈奴へと旅立つ。いよいよ辺塞の地に入るというところで，彼女は琴をかき鳴らし，離別を悲しむ曲を奏でると，折しも南へ行く雁がその哀切な音色を聞き，馬上の美しい女性に目を奪われ，翼を動かすことも忘れ地上に落下したという。

2008©ASAHI e-text 編集委員

【貂蝉】（ちょうせん）貂蝉は三国時代の後漢の献帝の大臣王允の歌姫であった。王允は彼女が容貌，技芸ともにすぐれ，かつ聡明であることから自分の養女に迎える。中秋節のおり，貂蝉が花園で月を眺めていると，突如風が吹いてきて，ひとひらの雲が名月を覆い隠した。それを見た王允はわが娘がいかに美しいかを吹聴して「娘は月と美を競い，月はかなわぬと見るや雲間に身を隠した」と言った。かくて貂蝉は人々に「閉月」とその美を讃えられた。

（貂蝉のみ架空の人物，『三国志演義』に登場する。注：項羽の愛人，虞美人を貂蝉の替わりに四大美人の一人とする説もある）

【楊貴妃】（ようきひ）玄宗皇帝の寵姫。唐の開元年間，楊玉環（楊貴妃の本名）は選ばれて宮中に登った。楊玉環は宮中に入っても故郷が恋しくて仕方がなかった。ある日，彼女が花園で花を愛で気を晴らしていると，今を盛りと咲き誇る牡丹やバラが目にとまり，宮中に閉じ込められ，空しく青春が過ぎて行く我が身に思い到り，思わずため息を漏らして言った。「花よ，花よ，お前は年々歳々また咲くこともあろうが，私はいつになったら日が当たる時がくるのだろう」。そう言うと涙があふれ出てきて，彼女が花に触れると，その花はたまたま「オジギソウ」であり，たちまち花がしぼみ，葉が閉じた。その様子を目にした宮女が周りに言いふらしていった。「楊玉環は花と美しさを比べ，花の方が羞じらい，頭を下げてしぼんでしまった」。こうして「羞花」の言い方が広まった。

2008 © ASAHI e-text 編集委員